－th接尾辞と「－み」接尾辞の派生制約※

高　橋　勝　忠

0. 序

形容詞の基体に添加し名詞に変化させる接尾辞として英語には -ness, -ity, -th がある（e.g. true→trueness, *truity, truth; false→falseness, falsity, *fals(e)-th)。一方、生産性の観点からこれらの接尾辞と対応する日本語の接尾辞として、「－さ」と「－み」がある（e.g. 強い→強さ、強み；正しい→正しさ、*正しみ)。

英語における -ness と -ity, 日本語の「－さ」と「－み」の生産性についてはこれまで議論がなされて来た。結果として、-ness は -ity より、「－さ」は「－み」より生産性が高いと一般に言われている。[1]

このような一般化がなされると、-ness 派生は「－さ」派生に平行し、-ity 派生は「－み」派生に並行すると捉えられるかもしれないが、事実は必ずしもそうではない。なぜなら、「－み」派生語の基体の形容詞（e.g. 暖かい、深い、強い）に、-ity は決して添加しないからである（*warmity, *deepity, *strongity)。一方、warmth, depth, strength の形は認められるので「－み」は -th 派生によって生成されると捉えられるかもしれない。しかし、「－み」を意味する -th 派生語はこの3語に限定され、それ以外の「－み」派生語は -ness 派生によって生成されることが意外と多いことに気づく（第1節の(5)を参照)。言い

※　例文のチェックを Eileen Warner さんにお願いした。ここに記して、感謝の念を表します。

1　-ness と -ity の生産性については Aronoff（1976), Anshen and Aronoff（1988), 島村（1990）を、「－さ」と「－み」の生産性については影山（1993)、伊藤・杉岡（2002）を参照のこと。

換えると、「－み」派生語は-ityでもなく、-thでもなく、-nessによって生成されることになる。このことは、「－さ」派生語も -nessによって生成されるので、生産性が低いと考えられる「－み」派生がなぜ生産性が高い -ness派生によって生成されるのかが疑問となる。-th派生が「－み」派生と直接関係がないとすれば、-th派生語それ自体は（e.g. breadth, length, width）本来どのような意味を生み出すのであろうか。

本稿の目的は、-thと「－み」の接尾辞がどのような派生制約を持っているのかを調べることであるが、「－み」派生が-ity派生や-th派生と必ずしも関係するのではないことを明確にするために、まず第1節ではこれまであまり議論がなされていなかった生産性の低い-ity, -th,「－み」の接尾辞を比較検討し、これらの接尾辞の生産性の違いを指摘する。

第2節では、第1節の分析の結果を受けて、すなわち、-thと「－み」の生産性が異なる理由を明確にするために、-th派生の基体の成立条件として有標・無標という意味的概念が関係することを示す。その上で、-th接尾辞は数直線上の尺度を表す無標の形容詞にのみ添加することを提案する。一方、「－み」派生は有標・無標の両方の形容詞に添加することも可能であるが（第2節(20)を参照)、一般的には、「－み」派生は無標の形容詞が語彙化し、対象に対する3次元的(＝立体的)な意味合いで単語が生成されることを提案する。語彙化される-nessの一部の派生を除くと、-nessや「－さ」派生は生産性が高く規則的に生成され、-thや「－み」派生は生産性が低いのでどちらも最終的にはレキシコンに登録されると仮定する。3節において、-th接尾辞が「－み」接尾辞より生産性が低くなる理由をまとめとして述べる。

1. -thと-ityと「ーみ」の生産性

Siegel（1974), Allen（1978), Kiparsky（1982）等によって提唱されるレベル順序づけ仮説に従うと、-ityや -thは（1）のように基体の強勢移動や音韻変化を受ける結果、レベル1に位置づけられる。[2]

(1)　a. rEal→reAlity（cf. rEalness), simultAneous→ simultanEity（cf. simultAneousness）
b. broad→breadth（cf. broadness), wide→width（cf. wideness）

-ityや -thはレベル1に位置づけられるのでレベル2の -nessより基体に対する制限が厳しくなり生産性が低くなると言われているが、[3] しかし -ityと -thは同じ程度に生産性が低いのであろうか。

Carstairs-McCarthy（2002: 86）によると、-ityや -thは*richityや*greythのように派生過程において語彙的ギャップが生じるので -ness（e.g. richness, greyness）より形式的に一般的でない（much less general）と考えるが、-ityは -ive・-able・-ible・-al・-ar・-ic・-id・-ousの接尾辞で終わる形容詞を可能な基体として持ち（e.g. selective, capable, visible, local, polar, eccentric, liquid, various)、単音節の形容詞を取る -thの基体の制限より規則的に派生できることを指摘する。

単音節の形容詞は実際多く存在するので、どのような単音節の形容詞を -thが取るかがここでは問題となるが、この問題を考える前に、-th は実際に単音節の形容詞に限定されるのかどうか具体例を見てみよう。[4]

2　キャピタル・レターは第一強勢の位置を示し、イタリックは音韻変化を受ける部分を示す。（1a）のsimultanEityは -ous 切り取り規則も適用されている。-ous切り取りに関してはAronoff（1976: 40）を参照のこと。

3. Aronoff（1976: 36）は -ness と -ity 派生語の生産性に触れ、必ずしも辞書的な数が生産性を決定するのではなく、基体に課される制限を考慮しなければならないことを指摘する。例えば、XivenessはXivityより5倍の数がWalker（1936）の辞書に載せられているが、XilityはXilenessより遥かに数が勝る。さらに、島村（1990: 32-34）では実際の辞書的数と使用頻度（トークン頻度）を比較すると -ityの派生が -nessの派生よりも使用頻度が高くなることが指摘されている。

4. Lehnert（1971）から具体例を取上げた。filth, health, wealthも歴史的には形容由来名詞であるが、共時的には派生語として認識されないのでリストから除外している。なお、Walker's Rhyming Dictionary of the English Language（1983）にはcoolthの語は載せられていない。

(2)　a. coelacanth（シーラカンス）, hyacinth（ヒヤシンス）, mammoth（マンモス）
b. dozenth, eleventh, hundredth, millionth, seventh, thousandth
c. breadth（broad）, coolth（cool）, depth（deep）, greenth（green）, length（long）, strength（strong）, truth（true）, warmth（warm）, width（wide）, youth（young）

(2a) における例は、2音節か3音節の単語であるが形容詞から派生されたものではない。(2b) はいわゆる序数で、(2c) の派生語とは区別されるものである。したがって、-thが単音節の形容詞を基体に取るというのは正しく、(2c) の10例しか見つからない点と -th は多音節の形容詞には添加しないことから判断すると -th は -ity より生産性は低いものと考えられる。[5] Bauer (1983: 49) によると、-thは共時的には (3) のような新しい形容詞に添加して名詞形を生じさせない特徴があり、warmthのような語は語彙化されているとみなす。

(3)　*cameoth, *funkyth, *maxith, *psychedelicth, *surrealth

この点、-thは接尾辞の「－さ」より「－み」に近いものと考えられる。なぜなら、「－さ」は (4) に見られるように最近の若者言葉の形容詞に自由に添加できるが、「－み」はその同じ形容詞に添加して名詞形を生み出さないからである。[6]

(4)　ナウさ（*ナウみ）、ダサさ（*ダサみ）、ケバさ（*ケバみ）、キモさ（*キモみ）

「－さ」と「－み」の接尾辞は形容詞から名詞に変える共通性と生産性の関係

5　-ityも単音節の形容詞を基体に取るが（e.g. clarity, oddity, purity, rarity, sanity）生産性は低く、例外的なoddityを除くと基体の形容詞はラテン系の起源に制限される。
6　伊藤・杉岡 (2002: 166) の例に、「－み」の派生語を筆者が加えたもの。

から -ness と -ity に対応するものとしてこれまで捉えられてきた。しかし、「－み」と-ityはレキシコンにおいて厳密には対応していないことが（5）に挙げた例から分かる。

（5）　強み *strongity, strength 強さ；強度；濃さ；強み；兵力
（cf. strongness 強さ）
弱み *weakity, *weakth
（cf. weakness　弱さ；弱み；不十分；大好物）
深み *deepity, depth 深さ；深み；色・音の低さ
（cf. deepness 深さ；深遠さ）
浅み *shallowity, *shallowth
（cf. shallowness 浅さ；浅はかさ）
温かみ*warmity, warmth 暖かさ；興奮；温かみ；色の暖かさ
（cf. warmness=warmth）
重み *heavity, *heavith cf. weight 重さ；重荷；重み）
（cf. heaviness 重さ；無気力；重荷）
高み *highity, *highth cf. height 高さ；高み；最高潮
（cf. highness 高いこと；高価；殿下）
低み *lowity, *lowth
（cf. lowness 低いこと；身分の低いこと；元気のないこと）
甘み *sweetity, *sweetth
（cf. sweetness 甘さ；甘味；愛らしさ；快適）
苦（し）み *bitterity, *bitterth
（cf. bitterness 味の苦さ；苦しみ；恨み）
悲しみ *sadity, *sadth
（cf. sadness 悲しさ；悲しみ；悲しいこと）
青み *blueity, *blueth
（cf. blueness 青さ；下品；青み）
赤み *redity, *redth
（cf. redness 赤いこと；赤色；赤み）

「強み」・「深み」・「浅み」・「重み」・「高み」・「低み」を除くと、むしろ「－み」の派生語は -ness 接尾辞によって生成されている。[7] また、その中で、「強み」・

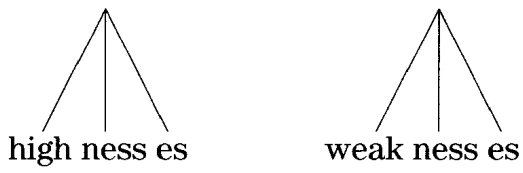
7 「浅み」と「低み」は場所を意味するが、shallownessとlownessにはこの意味が出て来ないようである。

「深み」・「重み」・「高み」の表現は -ity ではなくて strength, depth, weight, height で形成されている。したがって、「－み」派生は -ity とは全く関係しないことが分かる。-th 派生の warmth, depth, strength の3語は「－み」派生に関与するが、これらの語も基本的には尺度を表す派生語と見なされる。「－み」派生に -ness 接尾辞が導入されたのは、(5) の比較から分かるようにレベル1で生成される -ity や -th 派生語の欠如から来るものと考えられる。

伊藤・杉岡 (2002: 9) では、生産性の高い -ness 接尾辞の派生語の weakness は「弱さ」の意味に加えて「特別な好み」(e.g. I have a weakness for chocolate) の語彙化した意味があることを指摘する。さらに、「弱点・弱み・短所」(e.g. The car has a serious weakness) の特殊な意味も weakness に追加されよう。また、highness のように基体の意味が不透明となる「殿下」という意味が -ness 派生語に見られる (e.g. This is indeed an honor, your Highness)。この意味では highness は複数形でも用いられる。また、The plan has strengths and weaknesses (その計画には長所と短所がある) の文に見られるように -th や -ness 接尾辞のあとに複数形の -s や -es が来ている例も見受けられる。

Kiparsky (1982: 5) のレベル順序づけ仮説に従うと -th はレベル1に、-ness はレベル2に、規則的な複数形はレベル3で生成されるので -ths や -nesses の順序づけに問題は生じないが、レベルを用いないで派生と屈折を同様に扱う強語彙論派 (Strong Lexicalist) にとっては (6) のように二股枝分かれ構造制約 (Binary Branching Condition) の違反となるので問題となる。

(6)



いずれにしても、語彙化した意味を持つ -ness 派生語はデフォルト規則に拠るのではなくレキシコンの中で登録されているものと考えられる。[8]

8　デフォルト規則は本来、屈折接辞に適用される概念であるが、島村 (1995: 50-61) や伊藤・杉岡 (2002, 第4章) では派生接辞への応用を試みる。

2. -th接尾辞と「ーみ」接尾辞の成立条件

第1節の（2c）において、-th接尾辞の派生は10個に限られ、現在では新しい形容詞に添加しない新造力のない接尾辞であることを（3）で見てきた。本節では -th 派生語の基体に共通の意味概念が存在することを示し、「－み」接尾辞との比較を行う。再度、（2c）の-th接尾辞の派生語を（7）として取上げ、辞書的意味を考えてみよう。

（7）
breadth	1）	幅；見識や心の広さ
	2）	（布などの）一定の幅
coolth	1）	涼しさ；冷静；冷淡
depth	1）	深さ；濃さ；深み
	2）	奥地；どん底
greenth	1）	（草木の）緑；新緑
length	1）	（幅や時間の）長さ
	2）	期間；プールの縦の長さ
strength	1）	強さ；強度；強み
	2）	長所；兵力
truth	1）	真実；正確さ
	2）	事実
warmth	1）	暖かさ；温かみ；熱狂
width	1）	幅；理解や知識の広さ
	2）	一定の幅
youth	1）	若さ；青春
	2）	青年

1）では抽象的意味を並べている。ほぼ、日本語の「－さ」に対応し、greenthを除くと物の長さや深さの尺度、温度や色や強さの基準、理解の広さや正確さなどを表す。2）では1）より具体的な意味を並べ、複数形も可能な意味合いを持つものを挙げている。

（7）の -th 派生で気づくことは、対立する意味の形容詞を持つ場合に、warmthとcoolthを除いて基体の意味が正反対となる形容詞を取らないことである。

(8)　*narrowth（cf. breadth, width）
*shallowth（cf. depth）
*shortth（cf. length）
*weakth（cf. strength）
*falseth（cf. truth）
*oldth（cf. youth）

安井・秋山・中村（1976: 181-183）やHofmann and Kageyama（1986: 13-16）において、有標・無標という概念が導入されている。彼らに従うと、形容詞が肯定的（positive）なものと否定的（negative）な意味が対立する場合、前者を一般的な無標の表現として捉え、後者を一般的でない有標な表現であると考える。この有標・無標の概念は形態的、統語的な現象を説明する。

例えば形態的な事実として、un-接頭辞は形容詞の基体を取る際に肯定的な意味を持つ基体の派生語（9a）を許すが、否定的な意味を持つ基体の派生語（9b）を許さない特徴を持つ。すなわち、un-は無標の形容詞を常に基体に取ることになる。

(9)　a. unwell, unloved, unhappy, unwise, unclean, unoptimistic
b. *unill, *unhated, *unsad, *unfoolish, *unfilthy, *undirty, *unpessimistic

統語的な事実として、Hofmann and Kageyama（1986: 14）は（10），（11）の例を挙げている。（10a, b）が自然な表現となるのはHowの次に肯定的な形容詞が使用されているからである。一方、否定的な形容詞が使用された（11a, b）は、話し手がすでに your brother やyour sister に対して「若いこと」や「背の低いこと」を事前に知っていて、さらにそのことを尋ねる状況でない限り不自然な表現となる。[9]

9　Hofmann and Kageyama（1986: 4）に従うと、!印は特別の文脈でなければ意味を成さない表現であることを示す。下線部は以降、強勢を表す。

(10)　a. how old is your brother?
　　b. how tall is your sister?
(11)　a. !how young is your brother?
　　b. !how short is your sister?

安井・秋山・中村（1976: 182-183）によると、(10) のような表現は年齢や背の高さを前提としない中立的な状況で使用される。また、(12) のようにhowに強勢が置かれる場合は、(a) で「長い」という前提があり、(b) で「短い」という前提があって使用されると主張する。

(12)　a. How long is it?
　　b. How short is it?

要するに、(10) のようにoldやtallに強勢があれば無標の形容詞として使用され、(12) のようにhowに強勢があればある種の前提が伴い、有標の形容詞として使用される。興味あることは、(11) のように形容詞が否定的な意味を持つ場合（厳密に言うと、oldやtallに対してマイナスの方向の意味を持つ場合）は、(13) に示すように有標となり不自然となる。[10]

(13) How broad (*narrow) is the road?
　　How wide (*narrow) is this river?
　　How deep (*shallow) is the snow?
　　How long (*short) is the flight to London?
　　How strong (*weak) is a mother's love for her child?

(13) の有標・無標の文法性の差異は (14) のように、形容詞が名詞形になっても見られる。また、(15) のように度量句（measure phrase）[11] として形容詞

10　ここでは、howに強勢が無く、形容詞に強勢が有る場合を前提にしている。なぜなら、(13) においてhowに強勢を置くとアステリスクの付いた例文が (12b) のように、ある種の前提を伴って正しくなるからである。

11　八木（1987: 22, 54-55）を参照。

が後続する場合にも無標の表現が使用される。有標・無標の文法性の差異は日本語にも観察され、「無標」という概念は実際の言語使用における普遍的な意味的概念として捉えられる。

(14) What is the breadth (*narrowness) of the road?
道路はどのくらいの広さ (*狭さ) ですか。
What is the width (*narrowness) of this river?
この川はどのくらいの広さ (*狭さ) ですか。
What is the depth (*shallowness) of the snow?
雪の深さ (*浅さ) はどのくらいですか。
What is the length (*shortness) of the flight to London?
ロンドンまでのフライトはどれぐらいの長さ (*短さ) ですか。
What is the strength (*weakness) of a mother's love for her child?
子供に対するお母さんの愛情の強さ (*弱さ) はどのくらいですか。

(15) The box is only 20 centimeters broad/wide (*narrow).
その箱はほんの20cmの横の広さ (*狭さ) しかない。
The pond is nine feet deep (*shallow).
池は9フィートの深さ (*浅さ) です。
The sofa is six feet long (*short).
ソファーは6フィートの長さ (*短さ) です。
This rope is three times *strong (*weak).[12]
このロープは3倍の強さ (*弱さ) です。

安井・秋山・中村 (1976: 260) によると、(13), (15) のように形容詞が無標の形で、how疑問文と度量表現の両方が使用できるタイプとして (16a) の形容詞があり、how疑問文は可能であるが度量表現の形容詞としては使用できないタイプとして (16b) の形容詞があることを指摘する。

12　ただしここでは、This rope is three times as strong (*weak) as that one (このロープはあのロープの3倍の強さである) のように、～times as ～asの表現やThe army was 5,000 strong (軍隊は総勢5千人だった) のように勢力人数を表す場合は可能となる。

(16) a. deep (shallow), tall (short), high (low), thick (thin), long (short), wide (narrow), old (young)
How old (*young) is your son?
あなたの息子は何歳ですか。
He's three months old (*young).
彼は3ヶ月です。
b. big (small), heavy (light), bright (dim), large (little), fat (thin), strong (weak)
How heavy (*light) is it?
どれぐらいの重さ (*軽さ) ですか。
It is two pounds (*heavy/*light).
2ポンドの重さ (*軽さ) です。

安井・秋山・中村 (1976) は (16a, b) の形容詞に見られる統語的分布の違いがなぜ生じるかに言及していない。(16a, b) の意味の違いを考えてみると、(a) の形容詞は縦・横・高さなどの長さの尺度を表し (b) では大きさや強さなど尺度的には捉えられない形容詞に属している。したがって、度量表現の形容詞として後続できないのは、計測することができない漠然とした対象であることに起因するのではなかろうか。なぜなら、計測できなければ数値も出てこないことになるからである。ただし、この捉え方は重量の測定は重量計でできるので*It is two pounds heavyはなぜ非文になるかを説明しなければならない。

ここで、問題を整理してみよう。(16a) の無標の形容詞は (15) のような度量表現の形容詞として使用されると同時に、(17) の派生名詞形としての用法も併せて可能である。

(17) The pond is nine feet in depth/*deepness.
The mountain is 3,000 meters in height/*highness.
The desk is four feet in length/*longness and 2 feet in width/*wideness.
The wall is five inches in thickness/breadth/*broadness/width/*wideness.
(cf. The wall is five inches thick/*thin.)
He is past sixty years of age/*oldness.

一方、(16b) の形容詞はweightの場合を除いて度量表現の派生名詞形としての用法はなさそうである。[13]

(18) He is 2 meters in *size/*bigness/*largeness.
He is 100 kilograms in weight/*heaviness/*fatness.
He is 400 kilograms in *strength/*strongness.
(cf. They equated us in strength.)
The light is 5 luces in *brightness.

これまで議論してきたことを基に、-th接尾辞の基体の制約を考えてみよう。(8), (14), (17), (18) の結果から、-thの基体となるのは「尺度を表す無標の形容詞で、しかも数直線上に値で示すことができる (16a) のようなタイプの形容詞である」と仮定する。ただし、(16a) において、tall, highの派生名詞形はheightによって、thickはbreadthあるいはwidthによって、oldはageによって先取りされ -th 派生が阻止されるとみなす。したがって、これらの形容詞には -th 接尾辞が添加しないと仮定する。[14] 同様に、(16b) において*It is two pounds heavy の代わりにIt is two pounds in weightの表現は可能なのでweightがheavyを阻止すると仮定できるかもしれない。しかし、この考えは (16a) のタイプの形容詞には当てはまらない。なぜなら、He is six feet tallやShe is six years oldのtallやoldがそのままの形で使え、He is six feet in heightやShe is six years of ageのheightやageによってtallやoldが阻止されると言えないからである。憶測の域をでない仮定であるが、度量表現として後続できない (16b) の形容詞の意味のタイプを考えると重量・強度・光度であることから、

13　安井・秋山・中村 (1976: 63) によると、(17) や (18) における派生名詞形 (depth, height, length, breadth, width, age, size, weight) は中立的な意味を持つためthickness を除いてそれらの -ness 派生語は常に対立的な意味合いになるとしている (e.g. the heaviness/lightness of the box, 箱が重い/軽いこと)。

14　OEDではhighthやheighthの形が歴史的に存在したことを説明している。13世紀に-thが-3や-ghのあとで-tに変化したようである。この歴史的過程を踏まえるとheightがhighを阻止するとは言えなくなる。

それらの意味を持つ形容詞は平面的・立体的に捉えることができない理由で度量表現が阻止されるのかもしれない。一方、兵力（strong）は平面的に捉えられ、(16a) における幅（broad, long, wide）や奥行き（deep）や高さ（high, tall）は立体的な対象を捉える事象であるのでこれらの意味を持つ形容詞は度量表現に後続することができるのかもしれない。問題は年齢や深さに関して生じるが、これも1次元的な座標を想定すると数直線上に表すことができるのかもしれない。[15]

-thの基体となるのは尺度を表す無標の形容詞であると仮定すると、(7) の-th派生語で問題となるのは、有標の表現のcoolth, youthがなぜ生じるかという点である。注の4で指摘したようにcoolthはWalkerの辞書には載せていない語であり、OEDやRHDは古く稀で滑稽な（archaic, rare, facetious）表現としている。現在では、この語を容認する人は一部の方言を除いて殆どいないと考えられる。[16] youthに関しては、old対youngにおける派生名詞形とみなすとyouthは有標の表現であるが、「青春時代・青年」の語彙化した意味が「若さ」(the state of being young) の意味より優先され、今日では語彙化した意味だけが辞書に登録されていると考える。[17] また、greenthはGeorge Eliotの詩の中で用いられる特殊な語で*greythや*redthなど色彩語には辞書的ギャップが生じるのが

15 「大きさ」は次元形容詞に属するが、度量表現としてはbig, large, fatが漠然としているため、具体的な数値が取れないと仮定する。(cf. What is your size?) Seuren (1978: 337-338) によると、温度感覚や時間の長さを表す度量句は非文としている (e.g. *20 degrees warm, *The meeting was two hours long)。これらの概念も数直線上に表されないものと考える。

16 Matthews (1991: 79) によると、coolthはwarmthから類推 (analogy) によって生成されると仮定する。生産性の高い接尾辞 (e.g. -ness, un-) は潜在的な語彙素 (potential lexeme) を規則で形成するが、coolthは生産性の低い接尾辞なので通時的 (diachronic) に捉えられ、以前は不可能であった派生が類推によって可能になると主張する。

17. Bochner (1993: 5-6) によると、youthはlengthより語彙化の度合いが高いのでyoungnessの方がlongnessより容認性が高くなることを指摘している。

一般的であるので、-th派生に残された例外的なものと考えたい。[18] truthはfalsityに対する反対語であるがlengthやwidthのように尺度を表さないので問題として残る。

最後に、日本語の「－み」の派生制約について見てみよう。「－み」は形容詞の語根に添加し、「－さ」と違って語幹には添加しない。また、(19c) の形容名詞に「－み」は添加しないと言われている。[19]

(19)　a. 重み (*軽み)、厚み (*薄み)、温かみ (*寒み)
　　b. 肌寒さ (*肌寒み)、奥深さ (*奥深み)、甘酸っぱさ (*甘酸っぱみ)
　　c. 活発さ (*活発み)、元気さ (*元気み)、丁寧さ (*丁寧み)

(19a) の「*寒み」のように、「*冷たみ」・「*涼しみ」・「*暑み」と温度を表す形容詞には「－み」が添加しないようである。「暖かみ」という語は温度表現 (e.g. *暖かみのある温度) というよりも「温かみのある言葉」や「温かみのある人」のように比喩的に使われる。同様に、「やわらかみ」(cf. *硬み) は硬度表現もあるが (e.g. 肉のやわらか身)、「やわらかみのある人」のように語彙化して使われる。「重み」や「厚み」は「重役らしい重みを備える」や「人柄に厚みを増す」のように比喩的に用いられる。もちろん、「雪の重みで枝が折れた」や「胸の厚みが増す」のように重さや厚さの表現も可能である。

18　Bauer (2003: 79) は、言語共同体 (speech community) における生産性と個人における生産性を区別する必要性を述べている。後者の生産性をindividual productivityと呼び、頻繁にhapax legomena (特定のコーパスにおいて1回だけ生じる語) を生み出すと仮定する。

19　影山 (1993: 16) によると、単一形態素 (e.g. 訪, 中, 肌, 奥, 深(い), 寒(い)) を語根とし、語根＋語根が結合して語幹 (e.g. 訪中, 奥深い, 肌寒い) になると仮定している。また、影山 (1993: 25) では、従来の形容動詞という言い方を避け、Martin (1975) に従い形容詞と名詞の両面を持つ形容名詞 (adjectival noun) を仮定する。この名詞は形態的に「－な」の屈折接尾辞を取るのが特徴であるが、「－さ」派生を許すが「－み」派生を許さない。

上記のように、(19a) の「－み」派生の形容詞は共通に無標表現で可能となる。しかし、(20) に挙げた語は有標・無標の両方の表現が可能であり、(21) に挙げた語は有標・無標の両方の表現が不可能となる。これらについてどのような意味制約が働くのか考えてみよう。

(20) 強み（弱み）、高み（低み）、明るみ（暗み）、深み（浅み）、楽しみ（悲しみ、苦しみ）
(21) *長み（*短み）、*広み（*狭み）、*遠み（*近み）

(20) の「楽しみ」・「悲しみ」・「苦しみ」は、「～む」という動詞の連体形があり、「お～になる」(e.g. お楽しみになる) が可能であることから動詞の連用形がゼロ派生で名詞になったものと考える。「親しみ」も動詞の連用形からゼロ派生で名詞になったものと思えるが、「お親しみになる」は不自然である。また、「彼に親しみを感じる」は自然であるが、「彼に楽しみ・悲しみ・苦しみを感じる」は不自然である。

「親しみ」と「楽しみ」・「悲しみ」・「苦しみ」との違いは対象が相手か自分かということと内面的・外面的な記述かということが関係しているようである。(22) のように対象（相手）に対する外面的な感情や評価の形容詞は「－み」派生は許されない。

(22) 騒がしい（*騒がしみ）、好ましい（*好ましみ）、怪しい（*怪しみ）、厚かましい（*厚かましみ）、恐ろしい（*恐ろしみ）

「－み」接尾辞は語彙化された意味を持つ場合、基本的には対象（人）に対する表現であると考えられる。上で見た温度表現で「温かみ」だけが可能なのは、対象が温度から人になっているからであり、(20) における「強み」・「弱み」・「深み」・「高み」・「明るみ」も (23) に見られるように、強度・深度・高度・光度の尺度的表現というよりも語彙化した意味が主流となっている。

(23)　a.「強み」：強さの程度；頼りになる点；長所
　　金が有るのが強みだ。
　　語学の強みを就職に活かした。
　　顔が広いのが強みだ。
　b.「弱み」：弱々しい感じ；うしろめたい所；短所
　　他人の弱みにつけこむ。
　　弱みを握っている。
　c.「高み」：高い所
　　高みの見物
　d.「明るみ」：(明るい所。おおやけ)
　　明るみで本を読む。
　　事件が明るみに出る。
　e.「深み」：深い所；深入りして逃れられない状態；奥行
　　沼の深みにはまる。
　　悪の深みにはまる。
　　深みのある人。

ここで、「弱み」のように有標の表現が語彙化されていることに注意したい。なぜなら、「低み」・「暗み」・「浅み」は有標の表現で語彙化した意味は含まれていないからである。[20]

(21) の「－み」が不自然なのは「－み」の派生語の基本的な意味として3次元的（立体的）に捉えられる対象であることが要求されるのであろう。1次元的（線的）な対象（e.g. 長さ）や2次元的（平面的）な対象（e.g. 広さ、距離）は、有標・無標とは無関係に「－み」派生語の基体の形容詞にはならない。

(19a)、(23a, b, e) における「－み」派生語は共通に「人」を対象にした比喩的な表現があることを考えると、「人」を3次元的（立体的）な対象として捉えることができるのかもしれない。

20 「暗闇」には「暗闇の鉄砲」のように語彙化した意味がある。「高みの見物」には第三者的に物事を傍観するという語彙化した意味があるが、「高み」それ自体には特殊な意味が含意されていない。

3. 結　語

Marchand（1960: 285）によると-th接尾辞はOEやMEの時期に生産的に造られたそうである。ところが、なぜ派生を止めてしまったのであろうか。2節の議論から、-th接尾辞の基体の意味的要請は尺度を表す形容詞に限定され、しかもその形容詞が無標の意味を持つものに絞られた結果であるということが言える。一方、「－み」接尾辞は尺度を表す形容詞には添加せず、3次元的（立体的）な対象の内面的記述を行うと言える。有標の「低み」・「暗み」・「浅み」を除くと、無標の形容詞が語彙化し、対象となる「人」の内面を比喩的に表現することができる。さらに、「－み」派生は「味覚」（e.g. 甘味、辛味、渋味）や「視覚」（e.g. 赤身、白身、太身、細身）への意味的拡張があり、類推の過程によって生成されると考える。また、「やわらか味」のような共感覚的（synesthetic）比喩も存在する。[21] このように、「－み」派生は類推や比喩によって様々な表現が可能となっている。一方、-th派生にはこのような意味的拡張が無く、度量的表現に絞られる。[22] したがって「－み」接尾辞より-th接尾辞の方が生産性は低くなることが予測される。

References

Allen, Margaret. 1978. *Morphological* Investigations. Ph. D. dissertation, University of Connecticut.

Anshen, F. and M. Aronoff. 1988. "Producing Morphologically Complex Words." *Linguistics* 26, 641-655.

Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

21　伊藤・杉岡（2002: 166）は味覚を連想記憶と関連付けたアナロジーとして分析している。共感覚に関してはWilliams（1976）を参照。

22　-th派生は複合語においても度量的表現が継承される（e.g. whole-length（全長の）、handbreadth（手幅）、full-width（全幅の）、bending strength（曲げ強さ）、controlling depth（制限深度））。

Bauer, Laurie. 1983. *English Word-Formation.* Cambridge: Cambridge University Press.

Bauer, Laurie. 2003. *Introducing Linguistic Morphology.* 2nd edition, Edinburgh: Edinburgh University Press.

Bochner, Harry. 1993. *Simplicity in Generative Morphology.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Carstairs-McCarthy, Andrew. 2002. *An Introduction to English Morphology.* Edinburgh: Edinburgh University Press.

Hofmann, Th.R. and T. Kageyama. 1986. *10 Voyages in the Realms of Meaning.* 東京：くろしお出版.

伊藤たかね・杉岡洋子. 2002.『語の仕組みと語形成』東京：研究社.

影山太郎. 1993.『文法と語形成』春日部：ひつじ書房.

Kiparsky, Paul. 1982. "Lexical Morphology and Phonology." In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 3-91. Seoul: Hanshin.

Lehnert, Martin. 1971. *Reverse Dictionary of Present-Day English.* Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie.

Marchand, Hans. 1960. *The Categories and Types of Present-Day English Word-Formation: A Synchronic-Diachronic Approach.* Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Martin, Samuel. 1975. *A Reference Grammar of Japanese.* New Haven, CT: Yale University Press.

Matthews, Peter. 1991. *Morphology,* 2nd edition, Cambridge: Cambridge University Press.

Seuren, Pieter. 1978. "The Structure and Selection of Positive and Negative Adjectives." *Papers from the Parasession on the Lexicon.* Chicage Linguistic Society, 336-346.

Siegel, Dorothy. 1974. *Topics in English Morphology.* Ph.D. dissertation, MIT.

島村礼子. 1990.『英語の語形成と生産性』東京：リーベル出版.

Walker, John. 1936. *Walker's Rhyming Dictionary*, revised and enlarged by L.H. Dawson. New York: Dutton.

Walker, John. 1983. *Walker's Rhyming Dictionary of the English Language*. New edition with supplement compiled by Michael Freeman. London: Routledge & Keganpaul.

Williams, Joseph. 1976. "Synaesthetic Adjectives: A Possible Law of Semantic Change." *Language* 52, 461-478.

八木孝夫. 1987.『程度表現と比較構文』（新英文法選書7）東京：大修館.

安井稔・秋山怜・中村捷. 1976.『形容詞』（現代の英文法7）東京：研究社.